
銀河英雄伝説～美しい夢～

azurairu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄伝説〜美しい夢〜

【Nコード】

N47730

【作者名】

azurairu

【あらすじ】

この小説は銀河英雄伝説〜新たなる潮流（エーリツヒ・ヴァレンシュタイン伝）の第60話以降の派生小説になります。

この小説は「らいとすたっフルール2004」にしたがって作成されています

美しい夢（その1）（前書き）

別伝で出していました但今回新規に別小説にしました

美しい夢（その1）

■帝国暦486年7月10日 帝都オーディン ブラウンシュバイク公爵邸 オットー・フォン・ブラウンシュヴァイク

今日もよい天気だ。ここ数日、オーディンは好天に恵まれている。この天気は後三、四日は続くらしい。その後は台風が来ると予報では言っていたな。台風が来ると花は散ってしまう、惜しいことだ。サンルームに置かれたアームチェアに座りながらそんな事を考えた。

ブラウンシュバイク公爵家にもやがて嵐が来るだろう。皇帝陛下崩御という嵐だ。そして花が散るようにブラウンシュバイク公爵家も散るに違いない。我らは迫り来る嵐を凌ぐ事はできぬだろう……。

陛下に万一のことが有れば、リヒテンラーデ侯はミュッケンベルガー元帥と組む可能性が高い。そうなればブラウンシュバイク一門はリッテンハイム一門と組んで戦う事になるだろう。貴族連合か……、兵力だけなら正規軍を上回るかもしれぬ。しかし、役には立たぬ。

クロプシュトック侯討伐で判った。あれは烏合の衆だ、正規軍には絶対勝てぬ。何より貴族どもが、戦争というものを知らぬ。兵はあつても兵の使い方を知らぬのだ。ミュッケンベルガー元帥もわかつているだろう、貴族連合など恐れるに足らぬと。

陛下崩御の折、リヒテンラーデ侯に服従する手もある。しかしいまさら降りる事を周囲が許すはずが無い。最悪の場合、わしを殺しエリザベートを盟主にするだろう。そして戦に負ければ、命惜しさに誰かがエリザベートを売るに違いない。惨めな最後だ……。それを思えば服従は出来ぬ、エリザベートを守るために服従は出来ぬ。わ

しが盾になるしかない。

思えばクロプシュトック侯は大したものだった。最後まで侯を裏切るものはいなかった。もつと早くあの男と胸襟を開いて話し合うべきだったのか。良い相談相手になってくれたかも知れぬ……。

「お父様」

「おお、エリザベートか」

娘が、わしの対面に座っていた、いつの間に来たのだろう。

「変なお父様。何度もお呼びしましたのに」

「はっはっは、そうか。いや少し考え事をしていたのでな、気付かなかった」

やれやれ、娘の呼びかけにも気付かなかったとは、困ったものだ。

「エリザベート、何歳になった？」

「十五ですわ、覚えていらっしやいませんか？」

「う、いや、そんな事は無い、覚えているとも。そうか十五か」

美しくなった。柔らかな亜麻色の髪に、蒼い瞳。首筋の細さが目立つ。あと四、五年、いや二、三年もすれば艶やかな美しさを身にまとうだろう。早すぎる、死ぬのにはまだ早すぎるだろう。人を好きになったことさえ有るかどうか。まだまだこれからだ。

「エリザベート、お前は皇帝になりたいか？」

「……正直に答えてもよろしくて？」

「もちろんだとも、お前が正直な娘だという事をわしは知っておる」

「あまり、興味ありませんわ」

「……そうか、いや、そうだろうな」

「ごめんなさい、お父様」

「謝る事はない、エリザベート」

この娘には皇帝など無理だ。正直で嘘をつくことが出来ぬ、人を疑

う事も出来ぬ娘だ。何故わしは皇帝など望んだのだ。しかも今になつて無理だと気付くとは……。愚かな。

「お父様、ヴァレンシュタイン中將とはどのような方ですか？」

「なんだ、興味が有るのか」

そういう年頃になったか。

「フレーゲル男爵が死なずに済んだのは中將のおかげだと聞きましたから」

違つたか……。

「まあ、確かにそうだが、そのことは口外してはいかんぞ」

「はい」

「あの男は、敵に回せば恐ろしく、味方にすれば頼もしい男だ。それに他人の心の痛みがわかり、その痛みを無視できぬ男だ」

あの男が息子であればな。だれもあの男を皇帝として迎えるのに反対はすまい。たとえ皇帝にならずとも、次のブラウンシュバイク公として安心して全てを任せる事が出来ただろう。わしより良い当主となつたに違いない。エリザベートの事も任せておけたはずだ……。いかな、なにを馬鹿なことを考えている。あれは敵ではないか、それを息子などと……。息子が……。息子……。しかし……。

「お父様？」

「……」

「どうなさいましたの？」

死なせる事は出来ぬ。父親としてこの娘を守ってやらねばならぬ。娘一人守れぬようでなにが公爵か。

「エリザベート、ちよつと用事ができた」

「？」

わしは席を立つと足早に奥に向かった。

「アンスバッハ、アンスバッハはおらんか、シュトライト、フェル

ナーはどこにいる」

■帝国暦486年7月11日 新無憂宮 エーリツヒ・ヴァレンシュタイン

なんだか知らんが、新無憂宮に來いと國務尚書から呼び出しがかかった。俺はあんたの部下じゃないんだけどな。文句をいっても始まらない、ヴァレリーと一緒に新無憂宮に向かうことにした。しかしなにが有った？ まさかフリードリヒ四世がまたぶっ倒れたか。

ヴァレリーは蒼くなっているが、幸いミュッケンベルガー元帥がいるからあまり心配はいらないだろう。しかし、この時期の内乱は余り有り難くない。同盟に立ち直る機会を与えるようなものだ。厄介な事にならないればいいんだが。

宮内省の役人に案内されたのは東苑にある一室だった。東苑は先日の爆破事件から警備が厳しくなっている。部屋の前で警備兵が立っているが、はて、なにがある？

「遅くなりました。ヴァレンシュタインです」

中に入ると驚いたことに國務尚書のほか、帝国軍三長官、ブラウンシュバイク公、リッテンハイム侯がいる。何だこれは？ 帝国屈指の実力者が集まってなにをする気だ？ 大体なんで俺を呼んだ。妙な事はみんな表情が明るい事だ。少なくとも皇帝崩御は無い、となると何だろう？

「ヴァレンシュタイン中将、座るが良い」
「はっ」

國務尚書が席を勧めてくる。おかしいな、こいつらの笑顔は愛想笑

いじゃない、なんか面白がっているような感じだ。何かやったか俺？

「ヴァレンシュタイン中将、今日は卿によい話があるのだ」

「良い話ですか」

司会進行役は國務尚書か。しかし良い話？ この面子で良い話と言われても怪しいもんだ。

「ブラウンシュバイク公がな、卿を養子に迎えたいといっておる」

「……は？」

何を言った、今？ 俺は思わず周囲を見回した。皆面白そうに笑っている。

「ヴァレンシュタイン中将、卿にわしの息子になって欲しいのだ」

「……」

ブラウンシュバイク公が何か言っているな。息子？ なんだそれ、さっぱりわからんぞ。わかるように説明しろ！

「申し訳ありません、小官にはよくわからないのですが、何かの冗談なのでしょうか？」

途端に皆爆笑した。なるほどやはり冗談か。安心した、俺も一緒に笑うとするか。

「冗談ではない。本当の話だ」

國務尚書、笑いながら言っても信憑性ゼロです。ふざけるな！

「ヴァレンシュタイン中将、わたしから説明しよう」

ミュッケンベルガー元帥が口を開いた。

「ブラウンシュバイク公が卿を養子に欲しいといっているのだ」
「……」

俺が門閥貴族の養子？ 何考えている？ 馬鹿たれが。

「もちろんフロイライン・ブラウンシュバイクと結婚する事になる

が、フロイラインはまだ十五なのでな、結婚は二、三年後となろう。その間、卿はフロイラインの婚約者ではなく公爵閣下の養子としてブラウンシュバイク公家の人間となる」

「……」

「ブラウンシュバイク公は卿を養子に迎えた後、隠居する。卿は跡を継ぎ、新たなブラウンシュバイク公になる」

いい加減にしろ！俺は養子になどならん。大体隠居ってどういう事だ。何を考えている？

「どういうことなのです。何故小官を養子に」

俺はブラウンシュバイク公を見詰めて問いかけた。答える義務があるはずだ、ブラウンシュバイク公。

「内乱を防ぐためだ、中将」

「内乱を防ぐ……」

内乱を防ぐ？ お前らを潰すなら内乱大いに結構だ。つまらん養子話など持ち出すな。

「このままでは、いずれ内乱になる。リヒテンラーデ・ミュッケンベルガー連合対ブラウンシュバイク・リッテンハイムの貴族連合だ、卿にもわかるう」

「はい」

お前らが負ける、間違いなくな。俺が叩き潰してやる。

「そうなれば、貴族連合は負ける事は間違いない。クロプシュトゥック侯討伐の有様を見れば明らかだ。だから、ブラウンシュバイク公爵家は皇位継承争いから降りる事とした。それには皆にわかる形で示す事が必要だ」

根性が無いのか、それとも賢いのか、こいつらは本当にわからん。

「それで小官を養子に？」

「そうだ、卿はミュッケンベルガー元帥の腹心だ。その卿を養子にするのだ。公爵家はリヒテンラーデ・ミュッケンベルガー連合に与するという事になる」

「では次の皇帝はどなたに」

「エルウィン・ヨーゼフ殿下だ。サビーネ・フォン・リッテンハイムが皇后になる」

「！」

リヒテンラーデ・ミュッケンベルガー・リッテンハイム・ブラウンシュバイクの四者連合か……。しかしよくわからんな、ブラウンシュバイク公になんのメリットが有る？ 一人割りを食っていないか？

「新公爵となつた卿は家門の格から上級大将に昇進する」

「！」

「新公爵の最初の任務は反乱軍の討伐という事になる。それに勝てば元帥に昇進し、宇宙艦隊副司令長官に就任する」

「！」

軍の重鎮、名より実を取ると言うことか。

「ヴァレンシュタイン中将」

リヒテンラーデ侯が俺に話しかけた。今度は笑っていない。

「この件は断る事は許されぬ」

「しかし、それは」

「内乱が起きれば何百万という人間の命が失われるじやろう。卿はそれで良いのか？ 卿が貴族に対して穏やかならぬ気持ちを持っていることは重々承知じゃ。だからといって己の感情で何百万という人間を見殺しに出来るのか？ ブラウンシュバイク公とて隠居して全てを卿に委ねると言っておるのじゃ。よく考えよ」

「……」

「ずるい言い方をしていることは百も承知じゃ。だがこれで帝国は安全になるのじゃ。逃げる事は許されぬ。すでに勅許も得ておる」

「勅許……」

汚いぞ、おまえら本当に汚い。

「陛下の御血筋の方の婚姻なのだ、当然であろう」

「し、しかし、小官は平民出身です。身分が釣り合いますまい」

とりあえずこれで逃げることだ。勅許まで得ている、撤回は難しいかもしれないが先ずは此処を凌ぐ、対策は後で考えよう。

「問題は無い。卿は平民かもしれないが、リメス男爵の血を引いているそうではないか」

「！」

「陛下が御教え下された。グリーンメルスハウゼン子爵から聞いたそうだ。喜んでお許し下されたぞ」

余計な事言いやがってあの爺、俺に恨みでも有るのか。汚いぞ、おまえら本当に汚い。よってたかつて弱いものいじめしやがって。だから俺は貴族が嫌いなんだ。

美しい夢（その2）

■帝国暦486年7月11日 新無憂宮 ヴアレリー・リン・
フィッツシモンズ

部屋から人が出てきた。驚いたことに國務尚書リヒテンラーデ侯、軍務尚書エーレンベルク元帥、統帥本部長シュタインホフ元帥、宇宙艦隊司令長官ミュッケンベルガー元帥、ブラウンシュバイク公それにリッテンハイム侯がいる。

何よこれ？ 帝国屈指の実力者が集まってなにしてたんだろ？ 皇帝陛下に何か有ったのかと思ってゾツとしたけど、皆表情が明るい。ブラウンシュバイク公もリッテンハイム侯もご機嫌よ、“いやー、良かった、良かった”とか“目出度い”とか言ってる。なんなのこれ？ いや、それよりうちの中將閣下は、なんで部屋から出てこないんだろ？

おそるおそる部屋に入ると中將は椅子に座っていた。何やってんのよ、脅かさないでよ、と言おうとしたけど、表情が変。眉間にしわが寄ってジツと一点を睨んでいる。普段の穏やかさなんて何処にも無い。声をかけられなくて立ち竦んでいると、私に気付いたのだろう、視線を向けてきた。怖い、いつもの穏やかでやさしい視線じゃない。鋭い突き刺すような視線だ、こんな目もできるんだ。

「皇帝陛下に拝謁します」

無機質な冷たい声だった。

「はい」

「少佐は先に戻ってもらえますか」

質問を許さない声だ。

「はい」

「ブラウンシュバイク公に仕えるフェルナー中佐、いやフェルナー大佐、それとミュラー少将を呼んでもらえますか」

「はい」

それだけ言つと中将は立ち上がり、私のことなど一顧だにせず部屋を出て行つた。部屋から出て行くのを見た直後、私は崩れ落ちるように手近にあつた椅子に座り込んだ。何があつたのだろつ、あれは中将じゃない、もっと別な何かだ。震える体を両手で押さえつつ、私は泣き出しそうになるのを必死でこらえた。

■帝国暦486年7月11日 新無憂宮 バラ園 エーリツヒ・ヴァレンシュタイン

今日も皇帝は剪定ばさみを手にバラを見ている。俺は皇帝に近づきひざまずいた。

「来たか」

「はっ」

「予に訊きたい事が有るのではないか？」

「……何故、養子縁組をお許しになつたのです？」

「ふむ、皆賛成だというのでな、予が反対するわけにもいかぬ」

「……」

ふざけるな、この野郎。

「フッフッフ、そう怒るな」

皇帝は俺のほうを見ずに言つた。もてあそばれているようで面白く

ない。

「……」

「帝国は滅びつつある」

「！」

俺は思わず皇帝の顔を見た。穏やかな表情だ、諦観？ パチンと皇帝がバラの枝を切った。枝が地面に落ちる。

「グリーンメルスハウゼンから予が放蕩した訳を聞いたか？」

「……」

「帝位継承争いを嫌ったというのもあるが、本心は違う、予には帝国が滅びるのをとめることが出来ぬと思うたからだ」

「……」

帝国が滅びる……。

「父、オトフリート五世の治世下、帝国はすでに崩壊への道を歩み始めておった。貴族たちが強大化し、政治は私物化されつつあった。帝国は緩やかに腐り始めておったのだ」

皇帝は穏やかな表情で話し続ける。相変わらず視線はバラに向けたままだ。俺が居る事に本当に気付いているのだろうか。それにしても表情と話しの内容になんと落差のあることが。

「……」

「予にはそれが判った。いずれ帝国は分裂し内乱状態になり、銀河帝国は存在しなくなると」

「なぜそれを止めないのです？」

皇帝はバラから視線をはずし、あらぬ方向を見た。相変わらず俺は無視だ。

「判るのと止めるのは別であろう。予には止めるだけの力はない……」

……

「……だから帝位がまわらぬように放蕩をしたと」

「うむ」

「……」

皇帝の横顔には無力感が漂っている。この男の悲劇だ、誰よりも未来が見えたのにそれを変える力がなかった。皇帝という座につきながら出来なかったのだ。苦痛だったろう。

「しかし、皮肉な事に帝位は予に回ってきた。それから滅びるのを先へ伸ばすのが予の仕事になった。何の楽しみも無い、滅亡を見据えながら生きる一生……、苦痛であった。素面ではできぬ事だ」

「……」

皇帝の声に苦い響きがある。日々酒を飲んだのはそのせいか……。皇帝が俺に顔を向けた。疲れきった老人の顔が有る。

「見るがよい、今の帝国を。門閥貴族は肥大化し、互いに勢力を張り合い始めた。国務尚書は何とか食い止めようとしているが果たしてどうなるかの」

たしかにその通りだ、原作では暴発した。

「内乱になってもミュッケンベルガー元帥がおられます。帝国は安泰でしょう」

気休めでしかない、それでも俺は言わざるを得ない。

「そうはなるまいな、内乱が終わればエリザベートもサビーネもこの世には居るまい。さすれば、皇族と言えるのはエルウィン・ヨーゼフ一人だけじゃ。そしてあれの資質は聡明とはいえない。いずれ混乱の中で帝国は自滅するだろう。そちはそれでも帝国は安泰だと言っかの」

「……」

皇帝の答えは明快で声は自嘲を含んでいた。そこまで読んでいたか……。

皇帝程、帝国の未来を見詰め続けた男はいないのではないだろうか。その結果は常に悲惨な未来しか見えなかっただろう。皇帝の放蕩を俺には責める事は出来ない……。実際、酒を飲むのも女を抱くのも楽しみからでは有るまい。絶望から逃げるためだろう。

「そんな時、あの者にあつた、ラインハルト・フォン・ミーゼル。誰もが予に媚び、少しでも私腹を肥やそうとする中、あれはまっすぐに予に、そして貴族達に憎悪を向けてきた、心地よかつたぞ。あの憎悪と覇気、才能。あれならばこの帝国を再生、いや新たに創生させるかも知れぬ、そう思つたのだ」

「……」

皇帝の声に喜びがある。ゴールデンバウム王朝の滅亡を悲しむより新たな帝国の誕生を望んだか……。皇帝はまたバラを見ている。楽しそうにバラを見ているが本当に見ているのはバラなのか？ 美しく、そして棘の有るバラ。まるで誰かのようにではないか。

「あれはゴールデンバウム王朝を滅ぼすであろう、しかし銀河帝国はあれの元で新しく生まれ変わるに違いない……。それからあれが予に近づいてくるのが楽しみであつた。ゴールデンバウム王朝が滅びるのは寂しいがそれも宿命ならばやむを得まい、せいぜい華麗に滅びればよい、そう思つておつたのじゃ」

「……」

華麗に滅びるか……。たしかにゴールデンバウム王朝からローエングラム王朝への交替は華麗といつて良いだろう。しかし流れた血量も少なくなかった。そしてローエングラム王朝は成立した直後から地球教、自由惑星同盟、ヤン・ウェンリー、ロイエンタールとの流血に彩られる事になる……。

「そんな時よ、そちが現れたのは。誰もが無視できぬ力を持ち始めたそちを誰が味方にするのか、それによって帝国の未来が決まるだ

ろうと思った。まあ、ミューゼルの元へ行くのだろうと思っておつたがな。まさかブラウンシュバイク公がそちを養子に迎えたいと申すとは思わなんだ」

「……」

「驚いたが妙案だとも思った。言われてはじめて気付いたわ、帝国をゴールデンバウム王朝の元に再生させることができる唯一の策だと。新しい未来よな。久しぶりに興奮したわ。あの男がこんな策を考えるとは、伊達にブラウンシュバイク公として宮中で生きてきたわけではないと思うとおかしかったの。フッフッフ、平坦な道ではない、混乱もあるう。しかし内乱よりは流れる血の量も少ないに違いない」

「……」

勝手な事を言うな。俺はコンラート・ヴァレンシュタインの息子だ。貴族になどなるつもりは無い。

「そちに帝国を預ける」

「！」

気が付くと皇帝は俺を見ていた。静かな落ち着いた眼だ。

「いい加減な気持ちで言うのではないぞ。予の寿命は持つてあと三年であるうな。遺言と思うて聞いてくれ」

「帝国を再生できるのはミューゼルかそちであるう。ミューゼルとそちは正反対よな。ミューゼルが火なら、そちは水よ。あれは全てを焼き尽くして新たな帝国を作るに違いない。犠牲は多かるう……。そちは違う、不要なものだけ洗い流して帝国を作り直すに違いない。時間はかかるうが犠牲は少なかるう。予はそちを選ぶ、皆がそちを選んだようにな」

「皆ですか？」

「そうだ。国務尚書、帝国軍三長官、ブラウンシュバイク公、リッ

テンハイム侯、今はわからなくともいずれ気付く」

「……」

「エルウィン・ヨーゼフは決して聡明とはいいがたい。多くの者があれを皇帝にしたことを後悔するだろう。そうなれば、人々の人望はそちに集まる。そちとエリザベートが帝国を動かしてゆく事になるのだ。帝国を頼む。予はこの国の民を幸せにする事が出来なんだがそちなら出来るかもしれぬ。頼むぞ」

皇帝はそれだけ告げると、俺に背を向けバラ園を去っていった。俺は託されたものの重さに呆然としつつ、去り行く皇帝の姿を見つめ続けた。

美しい夢（その3）

■帝国暦486年7月11日 帝都オーデイン アントン・フエルナー

「判りました。それでは兵站統括部第三局へお伺いします」

やっぱり呼び出されたか……。怒ってるんだろっな、エーリッヒ。

「どうした、フェルナー大佐」

「アンスバッハ准将、エーリッヒに呼び出されましたよ」

「ほう、そうか。御祝いを述べるんだな、未来の公爵閣下」

笑いながらうれしそうにアンスバッハ准将が言う。

「冗談は止めてください。殺されますよ、そんなことしたら」

アンスバッハ准将も酷い、判っていて言うんだからな。

「誰が殺されるのかな、フェルナー大佐」

「もちろん小官ですよ、シュトライト准将」

「卿が殺されてヴァレンシュタイン中將が納得するならそれも良いな、違うかな？ アンスバッハ准将」

こっちはにこりともせず怖い事を言う。

「確かにそうですが、出来れば生きて戻って欲しいものです。小官たちにとっても大切な玩具ですからな」

「なに、玩具ならもうすぐ新しいのが届くさ、そうだろう」

酷いもんだ。二人とも半分くらいは本気で言っているから始末が悪い。心の捻じ曲がった大人になっちゃいけないって事だな。

「言っておきますが、エーリツヒは怒らせると怖いですよ。玩具だなんてとんでもない」

「冗談だよ、大佐。それより中将にきちんと説明して納得してもらってくれ。不満を持ったまま来られてはエリザベート様がお気の毒だ」

「判っています。出来る限りのことはします。でも保障は出来ませんよ」

ブラウンシュバイク公邸から兵站統括部へは地乗車で約三十分ほどかかる。受付で来訪を告げると、すぐ女性が迎えに来た。なかなかの美人だ。エーリツヒの副官のフィッツシモンズ少佐だった。少佐は挨拶をすると兵站統括部第三局の応接室へ通してくれた。

「アントン、どうして此处に」

「！」

先客がいた。中にいたのはナイトハルトとギユンターだった。

「卿らこそ、どうして此处に」

「俺は呼び出されたんだ、ギユンターは何か用事が有るらしい」

ナイトハルトは未だ知らないな。ギユンターは知っているようだ。

俺の方を妙な目で見ている。

「ギユンター、何故此处に？」

とぼけて訊いてみるか。

「憲兵総監から命を受けた。それで此处に来たんだ。卿だな、この一件を仕掛けたのは？」

憲兵総監？ 軍務尚書が手を回したか。

「……なんの事かな、よくわからんが」

「とぼけるな。エーリツヒは怒ってるぞ、言っておくが俺は助けんからな」

「……」

「なんの話だ？」

ナイトハルト、卿も知ったら俺を責めるだろうな……。

ドアが開いてエーリツヒが入ってきた。表情が硬い。まずいな、明らかに怒っている。いや怒っているのは予想できたんだが、やはりまずい。俺たちを見てギウンターがいるのに驚いたようだ。ギウンターに話しかける。

「どうしてここに」

「憲兵総監から命を受けた。訳はアントンが知っているようだな」

「憲兵総監……そうか、そうだね、きつちりと聞かせてもらおう。

ここじゃなんだから、場所を変えようか」

エーリツヒは引き攣ったような笑みを浮かべて俺を見る。

「それがいいだろうな」

ギウンターはにこりもしない。お前ら、そんなに俺にプレッシャーかけて楽しいか？

俺たちが案内されたのは兵站統括部の地下2階にある資料室だった。通称「物置部屋」と言うらしい。ナイトハルトは一度きたことが有るようだ。“懐かしい”と言っている。お前はいいよな、暢気で。俺は処刑場に引かれていく死刑囚の気分だ。フィッツシモンズ少佐も入るように言われてちょっと戸惑いながら入ってくる。怯えているのか？

■帝国暦486年7月11日

兵站統括部地下2階 資料室

ナイトハルト・ミュラー

どうも変だ。ギウンターもエーリツヒもにこりもしない、明らか

に怒っている。フィッツシモンズ少佐はなにやら怖がっている感じだ。アントンは平静を装っているがこいつも緊張している。何があった？

「さて、アントンどうしてこうなったか、聞かせてもらおうか」

エーリッヒはいつもとは違う引き攣ったような笑みを浮かべている。アントン、一体何をやった？

「いや、まあ、その、怒ってるか、やっぱり」

「当たり前だ！ この私が、ブラウンシュバイク公の養子とはどういうことだ」

「養子！ ブラウンシュバイク公の」

思わず俺は声を上げ、フィッツシモンズ少佐と顔を見合わせた。彼女も驚きで混乱している。

「ちょっと待て、ブラウンシュバイク公の養子って何の話だ？」
何だそれ？ おかしくないか？

「その通りの話さ。ブラウンシュバイク公が私を養子に欲しいそう
だ」

エーリッヒはとげのある口調で答える。視線はアントンに向けたままだ。

「フロイライン・ブラウンシュバイクとはどうなるんだ？」

まさか結婚するのか、相手は皇帝の孫だぞ。

「結婚するらしいよ、私と」

「つまり婿養子か？」

「違う、養子が先で、結婚はあとだ」

よくわからんな。何処が違うんだ？

「しかし、そんな事出来るのか？ 大体ブラウンシュバイク公はフロイラインを皇帝にしたかったんじゃないのか」

「諦めたんだろうね」

「諦めた？」

「ああ、そこにいるアントンが説得したんだろう、違うかな」
「エーリツヒは好意の一欠けらも無い視線でアントンを見る。つられて俺もアントンを見た。」

「ああ、少し違うな。最初にフロイラインの夫に卿をとい出だしたのはブラウンシュバイク公だ」

こいつの悪いところは、どんな状況でも平然としている事だ。可愛げがまるで無い。

「だからって」

「落ち着け、最後まで話を聞け」

抗議しようとした俺をアントンは落ち着いた声で制し話しなじめた。

「先日のクロプシュトック侯反乱鎮圧からブラウンシュバイク公を始め、俺たちは危機感を持っていた」

「危機感？」

「絶望感といってもいいかな。このままでは内乱になったとき間違はなく負ける、そう判ったからだ。貴族連合なんて、何の役にも立たない。いやというほど思い知らされたよ」

アントンの声には苦味がある。余程のことがあつたんだろう。

「……」

「どうしたらいいか毎日考えたよ。だが良い案がなかった。単純に皇位継承争いから降りるといっても周りが許さない。それなりの実利がないとな。家の存続がかかっているんだ、皆必死さ。まるで迷路の中を歩いているような気分だった。うんざりしたよ」

苦味は益々強まった。嘘はついていない、だがそれと養子話がどう結びつく？

「……」

「そんな時だ、ブラウنشユバイク公がエーリツヒとフロイラインを結婚させると言い出したのは。呆れたよ、気でも狂ったかと思っ
た」

「いまでも呆れてるんじゃないか、こいつ。」

「……」

「しかし、公の話を聞いているうちに行けると思った。それからは大変だった、公とアンスバツハ准将、シュトライト准将、そして俺四人で一日中考えた。考えれば考えるほど、上手くいくと思えた。興奮したよ、馬鹿みたいに騒いだ。俺たちは助かるってね」

「何故だ？」

「エーリツヒを養子にする。そして公は隠居し、エーリツヒが新当主になる。当然軍の階級もそれなりのものが用意されるだろう。ま、上級大将かな。飾り物の上級大将じゃない、実力のある上級大将だ。ナイトハルト、卿は戦争に行っていてわからんだろうが皇帝陛下不遇の折オーディンを支配したのはエーリツヒだった。階級が低いから皆認めたがらないが実力で言えば帝国軍三長官に次ぐ実力者なんだ。その実力に相応しい階級をブラウنشユバイク公爵家が用意する」

眼が据わっている。いつもの茶化すような眼じゃない。アントンは本気だ。俺は思わずフィツツシモンズ少佐を見た。少佐は睨むような眼でアントンを見ている。

「……」

「ブラウنشユバイク公爵家は宮中での力と新たに軍での力を得るんだ。十分元がとれるさ」

確かにそうかもしれない。しかし……。

「しかし、そんな事を國務尚書が認めるのか」

「認めるさ」

アントンは、あっさりと断定した。

「！」

「皆内乱なんてしたくないんだ。リッテンハイム侯も内乱になれば負けるのはわかってる。リヒテンラーデ侯も国内が乱れるのは避けたい、軍も反乱軍を相手にしている現状で御家騒動なんて御免だと思ってる。特にミュッケンベルガー元帥は深刻だ。内乱が何時起きるか判らない状況ではおちおち外征できない。皆内乱は避けたいんだ。ただ、どうしようもなくて此処まで来てしまった。きつかけさえあれば防げるんだ……」

「……」

そのきつかけがエーリツヒが養子になることが……。

「次の皇帝はエルウィン・ヨーゼフ殿下になる。皇后はサビーネ・フォン・リッテンハイムだ。皇帝をリヒテンラーデ侯が皇后をリッテンハイム侯が後見する。それをブラウンシュバイク公爵家が支える。皆丸く収まるさ」

何でも無いことのようにいうが……

「可能なのか、エーリツヒは貴族じゃないぞ」

「勅許を得たよ、問題ない。むしろ箔がついたようなもんだ。どんな貴族よりもフロイラインの結婚相手にふさわしいと皇帝が認めたんだからな。それにエーリツヒはリメス男爵の血を引いている。誰も文句は言えないさ」

「リメス男爵？」

エーリツヒはあのリメス男爵の血を引いているのか……。

「皆大喜びさ、完璧だってね。俺も同じ思いだ」

卿が喜ぶのは勝手だがな、目の前で卿を睨んでいるエーリツヒをどうにかしたほうがいいぞ。それとフィッツシモンズ少佐もだ。言っておくが俺もギュンターと一緒に、卿を助ける気は無い、頑張るんだな……。

美しい夢（その4）

■ 帝国暦486年7月11日 兵站統括部地下2階 資料室
ナイトハルト・ミュラー

「それで私を売ったというのか、ブラウンシュバイク公に」

怒りを押し殺した声だった。俺には彼の気持ちがわかる、いやアントンも判っているだろう……。

「……」

「私の気持ちはわかっていないはずだ、アントン」

「ああ、判っている。卿が門閥貴族を憎んでいる事、叩き潰してやりたいと思っていることもね」

静かな声だった。アントンは落ち着いている。表情も穏やかだ。

「なら、なんでこんなことを」

「卿のためだ」

「？」

「卿のためだと言ったんだ」

開き直ったような口調だった。何を言っているんだ、アントン。

「なぜ、フレーゲルを殺さなかった？」

フレーゲル？ 急死したフレーゲル男爵か。あれにエーリッヒは絡んでいるのか。

「……」

エーリッヒはアントンを睨みつけたまま口を閉ざしたままだ。アントンもエーリッヒから視線をはずさない。

「なぜ、フレーゲルを殺さなかったと聞いているんだ？」

「……ブラウンシュバイク公が暴発するのを防ぐためだ」

「違うな、卿は情にほだされたんだ」

「違う！」

「違わない！ フレーゲルが死んでも公は暴発しない。フロイラインを危うくするような事をするはずが無い。卿は情にほだされたんだ！」

「違う！」

怒鳴りあいに近いような言い合いだった。食い付きそうな眼でらみ合っている。

「苦しんでいる公を見て、耐えられなくなった。違うか」

「……」

エーリツヒは蒼白になっている。それでもアントンを睨みつけた、痛々しいほどだ。

「気を失ったフレーゲルを運ぶとき、なぜ俺たちが卿に目礼したと思う。卿の気持ちが判ったからさ。感謝しているんだ」

「……」

エーリツヒが視線をはずした。アントンもう止める。卿の勝ちだ。

「内乱になれば大勢の犠牲者が出る。それでいいのか」
アントン、止せ。

「貴族どもが滅びるなら大歓迎だ」

エーリツヒも止めるんだ。

「貴族だけで戦うわけじゃないぞ、大勢の人間に犠牲が出るんだ、何百万、いや一千万近い人間にだ。それでいいのか、エーリツヒ」
「……」

エーリツヒは小刻みに震えている。怒りか、それとも苦しみか。耐えられなくなった。

「もう止せ、アントン、その辺にしておけ」

「駄目だ、ナイトハルト。これは大事なことなんだ。エーリツヒ、卿には無理だ、耐えられんだろう、ちがうか？」

「……出来るさ。ミューゼル大将がいる。彼は天才だ、彼は貴族たちを滅ぼし、皇帝を廃して自らが皇帝になるつもりだ。私は彼と共に闘う。そして貴族たちを叩き潰す！」

搾り出すような声だった。それにしてもミューゼル大将が？ 確かに覇気の有る方だが……。

「……内乱を起してか？」

「そうだ」

もう止せエーリツヒ、どんな気持ちでその言葉を出した。

「内乱を起さなくても貴族たちを叩き潰せる、そう言ったらどうだ？」

内乱を起さない？ 冗談かと思ったがアントンの表情はいたって真面目だ。どうということだ？

「何を言っている？」

エーリツヒも意表を突かれたようだ、呆れたような顔をしている。

「ブラウンシュバイク公もリッテンハイム侯もリヒテンラーデ侯も卿の邪魔はしない、そうということだ」

「？」

「俺が卿の気持ちを考えないとも思ったか？ ブラウンシュバイク公に卿の気持ちを伝えたさ。卿が貴族たちを憎んでいる、滅ぼしたがついているとね」

「……」

「一向に構わないと言ったよ。利己主義で愚かで役に立たない貴族など必要ないそうだ」

必要ない？ 貴族が貴族を否定するのか？

「どういうことだ」

「ブラウンシュバイク公爵家は彼らのせいでもう少しで滅びかけたんだぞ、貴族たちに好意など欠片も有るものか。公はクロプシュトゥク侯の事を褒めていたよ」

「？」

クロプシュトゥク侯を褒める？ 反逆者をか？

「領民たちが誰もクロプシュトゥク侯を裏切らなかったと。クロプシュトゥク侯は三十年間宮中への出入りを差し止められた。その間領内の統治しかすることは無かったんだろ。善政を敷いたようだ」
「……」
なるほど、そういうことが。

「役に立たない貴族より、平民のほうが信頼できる、そう言っていたよ」

「ブラウンシュバイク公だけだ、他は違う」

エーリツヒは何処か投げやりな口調で言った。

「リッテンハイム侯もリヒテンラーデ侯も同じだ。昨日話したんだ」
「昨日？」

「ああ、俺たちの間で話がまとまった後、すぐにリッテンハイム侯とリヒテンラーデ侯に相談したのさ、そのとき貴族たちを潰すという話も出た。二人とも異存は無かった」

「まさか」

エーリツヒが呆れたような声を出した。

「本当だ。理由は同じさ、貴族連合なんて何の役にも立たない。リッテンハイム侯はもう少しでオッペンハイマーに乘せられて反逆者

になるところだった。彼の眼には貴族なんて役に立たない裏切り者にしか見えていないさ」

「……」

「リヒテンラーデ侯はもつと過激だった。あの老人にとって内乱は悪夢なんだ」

「違う、帝国の覇権を握る機会だ」

「エーリツヒが皮肉そうな口調で言った。

「そうじゃない、そんな事は望んでいない。内乱になれば帝国は疲弊し混乱する。その復旧にどれだけの時間がかかると思う。あの老人はもう七十を越えているんだぞ。彼に内乱の後始末をする時間が有ると思うか？ 片付ける前に過労死するさ」

「……」

「貴族とは皇室を守り帝国を守る藩屏であつた。しかし昨今、貴族はその本分を忘れ私利私欲に走っている。その結果、帝国を危うくし皇統を危うくした。存続する価値が無い」

「……」

「平民が、クロプシュトック侯を守ったように皇帝を守るのであれば、今後皇帝の、帝国の藩屏たる役割を担うのは平民であろう、リヒテンラーデ侯の言った言葉だ」

「……ありえない」

「呆然としている。俺も同感だ、リヒテンラーデ侯は貴族を否定している。侯でなければ反逆罪に問われてもおかしくない言葉だ。」

「そうだな、ありえないことだ。でも滅びかけて、皆わかつたのさ。今のままじゃいつか滅ぶと、今回ののは一時凌ぎでしかない」と

「……」

「滅びたくなければ、変わるしかないんだ。それを卿に任せようといっている」

「……」

「卿の好きにやれば良い、皆協力する。内乱を起す必要は無いんだ」
アントンがやさしげな口調で話しかけた。エーリツヒの肩に手をかける。

「酷い奴だ、私を身動きできないようにして。だから私は卿が嫌いなんだ」

エーリツヒがそっぽを向いたまま、すねるような口調でアントンを非難した。

「判っている。嫌ってくれてもいい。でも、俺は卿と戦いたくない……」

アントンは苦笑しながら、非難を受け入れた。こいつらはいつもそうだ、喧嘩しても最後は誰よりも理解しあっている。

「……皆、私の命を狙ってくるぞ。不平貴族、自由惑星同盟、フェザーン、そしてミューゼル大将……私を殺す気が、アントン」

「死なせはしない。俺が盾になる、その覚悟は出来てる」

「アントン、それは俺の役目だ。憲兵総監から命令を受けた。卿はエーリツヒを引っ担いで逃げろ」

「エーリツヒがそんな事を望むと思うか、ギウンター」
「……」

「卿には俺の盾になってもらう」

「……わかった」

「有能な艦隊司令官が要るな、どうやら俺も役に立てそうだ」

「小官を帝国に亡命させたのは閣下です。何処までもついていきます」

「……馬鹿だ、卿らは皆馬鹿だ、私は馬鹿は嫌いだ、卿らが嫌いだ」

泣き始めたエーリツヒを囲んで俺たちは皆笑い出した。幼ささえ感じさせるエーリツヒがどうにもいとおしかった。俺たちが歩むのは地獄だろう。でもそんな場所だからこそ、一人じゃないってのは大事なんだろうと思う。俺たちは大丈夫だ、きっと上手くいく。

美しい夢（その5）

■ 帝国暦486年7月12日 オーディン リルベルク・シュトラーゼ ジークフリード・キルヒアイス

ヴァレンシュタイン中将がミュラー少将と伴にラインハルト様を訪ねてきた。中将の表情は何処となく暗い翳りを帯びている。ミュラー少将は緊張気味だ。余り良い兆候とは言えない。他にも気になった事は中将には同行者が何人か居たことだ。中将は嫌そうな表情で護衛だと言っていたが中将に護衛など聞いた事がない。どういふことだろう。

ヴァレンシュタイン中将は部屋に入るとラインハルト様にケスラー少将、ロイエンタール少将、ミッターマイヤー少将を呼んで欲しいと頼んだ。皆に話さなければならぬ事が有ると。どうやら同行者のミュラー少将は既に知っているようだ。

ケスラー、ロイエンタール、ミッターマイヤー少将が来るまでの間、皆でお茶を飲んだ。フーバー未亡人が気を利かせてくれたのだが、用意されたのはコーヒーが四つだった。ヴァレンシュタイン中将は顔を顰めながらコーヒーを飲んで、いや舐めている。

ケスラー、ロイエンタール、ミッターマイヤー少将が来たのは十分以上経ってからの事だった。フーバー未亡人が改めてお茶を用意してくれた。今度は中将にはココアを用意してもらった。

「中将、それで話したい事とは何かな？」

ラインハルト様の問いかけに中将が大きく息を吐いた。ミユラー少将と顔を見合わせる。どうやら話し辛い事らしい。珍しい事だ、一体何が有るのか。ラインハルト様も訝しげな表情をしている。

「昨日、宮中に呼ばれました」

宮中に？ 中将が宮中に呼ばれた？ どういうことだろう、フレージャー男爵の事が漏れたのだろうか？

「そこである決定事項を伝えられました」

「決定事項？」

中将はラインハルト様の問いかけに頷くと言葉を続けた。

「私がブラウンシュバイク公の養子になると言う事です」

「ブラウンシュバイク公の養子……」

ラインハルト様が啞然とした表情で呟いた。私も同感だ、中将がブラウンシュバイク公の養子？ どういうことだ？ 私の思いを口に出したのはロイエンター少将だった。

「中将、閣下がブラウンシュバイク公の養子とはどういうことでしょうか？」

「私がブラウンシュバイク公の養子となります。公は引退し私が新たなブラウンシュバイク公になる。軍の階級も多分上級大將になるでしょう。そしてフロイライン・ブラウンシュバイクと結婚する。そういうことです」

今度は皆が呆然とした。中将がブラウンシュバイク公の養子？ 新たなブラウンシュバイク公？ どういうことだ？ 大体中将は平民だ、何の冗談だ？

「しかし、閣下は……」

「分かっています。私が平民だと言つのでしょう、ロイエンタール少将」

「ええ」

ロイエンタール少将が少し決まり悪げに頷いた。中將は溜息を吐くと困つたように話し始めた。

「実は私はリメス男爵の孫なのです」

「！」

「私の母が男爵の娘でした。母を産んだ祖母も平民で、私達は平民として生きてきた。私がリメス男爵を祖父だと知つたのは彼が死ぬ一週間前の事です。あのような事が無ければ一生知らずに済んだかもしれない」

中將がリメス男爵の孫……。中將の母親が男爵の娘……。皆がその事実には驚き顔を見合わせている。つまり中將は本来ならリメス男爵家を継ぐべき人間だったと言う事か。ならば公爵家の養子になつても不都合は無いのかもしれない……。しばらくの間沈黙が部屋を支配した。

「良く分からない。ブラウンシュバイク公は娘を女帝にするのを諦めたのか？」

ミッターマイヤー少将が呟くように言葉を吐いた。何人かが少將の言葉に頷く。私も同感だ、どうも良く分からない。ミッターマイヤー少將の言う通りだ。このままでは帝国はリッテンハイム侯の物になる。ブラウンシュバイク公はそれを認めるというのだろうか？

「次の皇帝はエルウィン・ヨーゼフ殿下になります。皇后はサビーネ・フォン・リッテンハイム……」

「！」

中将の言葉に皆が息を呑んだ。 中将は幾分不愉快そうな表情をしている。

「リッテンハイム侯は娘を皇后にする事で勢威を維持します。リヒテンラーデ侯はこれからも國務尚書として政權を維持する。そしてブラウンシュバイク公爵家の新当主は軍の重鎮として彼らを助ける

……」

「！」

つまりブラウンシュバイク公・リッテンハイム侯・リヒテンラーデ侯が組んだということか。そしてブラウンシュバイク公爵家の新当主……、ヴァレンシュタイン中将が軍の重鎮になって帝国を守る……。そう思っていると中将が幾分自嘲気味に笑いを漏らした。

「ブラウンシュバイク公、リッテンハイム侯、リヒテンラーデ侯、そして軍……。彼らはこれまでバラバラで反目していました。しかし今回彼らは協力して進む事を選択したんです。その犠牲が私です」

中将にとっては望んだことではないのだろう。そう思うと思わず溜息が出た。

「断わる事は出来ないのですか？ 中将」

ケスラー少将が中将を労わるように問いかけた。無理なのは分かっている。帝国の実力者達が決めたことなのだ。中将に断われるわけは無い。事実ケスラー少将の問いかけにヴァレンシュタイン中将は力なく首を横に振った。

「無理ですよ、ケスラー少将。この件では勅許がおりているんです」「勅許？」

ケスラー少将が鸚鵡返しに問いかけた。皆驚いたような顔をしている。勅許までがおりている。そこまで相手は本気だと言うことだ。

「ええ、勅許です。フロイライン・ブラウンシュバイクは皇孫ですからね。既に典礼省にも申請が出ています。勅許がおりているのですから却下される事は無い。おそらく明日にも認められるでしょう。私はブラウンシュバイク公爵家の人間になる」

“私はブラウンシュバイク公爵家の人間になる”、その言葉が部屋の中に重く響いた。誰もが重苦しい表情をしている。

「皆内乱を恐れているんです。ブラウンシュバイク公もリッテンハイム侯も内乱になれば負けると考えています。リヒテンラーデ侯も国内が乱れるのは避けたい、軍も内乱が何時起きるか判らない状況ではおちおち外征できない。皆内乱は避けたい、だから……」

だからヴァレンシュタイン中將を取り込み、事態の收拾を図った。ラインハルト様が見た。困惑したような表情をしている。これからどうなるのかが見えないのだろう。私も同感だ。中將がブラウンシュバイク公になる、そして貴族達が一つにまとまり始めた。貴族は怖くない、しかし貴族達には注意すべきだ。それが現実になりつつある。しかもこのままでは中將が敵になりかねない。これからどうなるのか……。

「ミューゼル提督、これから危険なのはミューゼル提督です」
「私？」

ヴァレンシュタイン中將の言葉にラインハルト様は訝しげに問い返した。中將が頷く。中將の表情は真剣だ、冗談で言っているわけではない。皆も驚いたような表情をして中將を見ている。

「貴族達はこれまで反目していました。だからミューゼル提督にもそれほど関心を払わなかった。しかしこれからは違います。一つに

まとめれば当然他に敵を探す。最初に標的にされるのはミューゼル提督です」

「……」

中將は私と同じ事を考えている。これからのラインハルト様は非常に危険な立場に置かれる事になる。そして敵対する相手になるのはヴァレンシュタイン中將、いや新ブラウンシュバイク公だろう。公爵家の力、そして新公爵の力量、恐ろしい敵となるだろう。

「ミューゼル提督は陛下の寵姫の弟と言う事で周囲から反感を買っています。しかしそれ以上に貴族達は提督が何時か皇帝に反逆するのではないかと恐れているんです」

「！」

ヴァレンシュタイン中將の言葉に部屋の空気が緊迫した。皆がラインハルト様と中將を交互に見ている。

「私に協力していただけませんか、ミューゼル提督」

「……卿に協力？」

中將が妙な事を言い出した。協力？ 一体何を協力しろと言うのだろうか。

「国内を改革します。貴族達の権力を制限し平民達の権利を拡大する。一部の特権階級が弱者を踏みにじるような今の帝国を変えるんです」

皆が驚いて中將を見た。しかし中將は気にする事も無くラインハルト様を見ている。

「そんな事が」

「出来ます。ブラウンシュバイク公もリッテンハイム侯もリヒテンラーデ侯も反対はしません。彼らは私が帝国を変えたがっている事

を知っている。そこまで決めた上で私を養子にと言ってきたんです」
「……」

有り得ない話だ、さっきまで驚いていた皆が今度は呆然と中將を見ている。もしかすると中將は彼らを信じてはいないのかもしれない。だからラインハルト様に協力を求めてきた……。有り得ない話ではないだろう。

「伯爵夫人を奪った陛下が許せませんか？」

「……」

「陛下はミューゼル提督が陛下を憎んでいる事をご存知です、篡奪の意志がある事も。その上で提督を引き立ててきた……」

「馬鹿な……」

ラインハルト様が呆然としたように言葉を出したが中將は首を振って言葉を続けた。

「本当のことです。あの方は凡庸ではない、凡庸な振りをしてきただけです。このままでは帝国は立ち行かなくなる。そう思ったからミューゼル提督に帝国の再生を委託しようとした……」

「……」

誰も声が出せない。あの凡庸と言われる皇帝が実際には違う？ そんな事があるのだろうか。

「一度お二人で会ってみては如何です」

「それは」

「会って見ても損は無いと思いますよ。本当の陛下を知っておくべきだと私は思います」

ヴァレンシュタイン中將が熱心にラインハルト様を説得する。ラインハルト様はしばらく迷っていたが、やがて意を決したように口を

開いた。

「……会ってみよう」

■ 帝国暦486年7月12日 オーデイン 新無憂宮 バラ園
ラインハルト・フォン・ミューゼル

会ってみようとは言ったがその日のうちに皇帝に会う事になるとは思わなかった。ヴァレンシュタインは時間を無駄にしまった。俺の同意を取り付けるとすぐさまリヒテンラーデ侯に連絡を取り、皇帝との面会を取り付けたのだ。しかも非公式と言うことでバラ園で会う事になっている。

バラ園に向かうと皇帝は既に俺を待っていた。驚いた事に姉上もいる。近付いて膝き、挨拶を言おうとすると皇帝がそれを押し留めた。「挨拶は無用じゃ、立つが良い。此处では虚飾は無用の物よ」「はっ」

どうすべきだろう、挨拶はいらないのだろうか立つて良いのだろうか。それとも此処は跪いたままでいるべきか。迷ったが姉上を見ると微かに頷くのが見えた。思い切って立ち上がった。そんな俺を見て皇帝は満足そうに笑みを浮かべて頷いている。

「そちが予に会いたいとは珍しいの、予に何を聞きたい？」

「……ヴァレンシュタイン中将がブラウンシュバイク公の養子になるとのことですが……」

俺の言葉に皇帝は黙って頷いた。傍にいる姉上が驚いたような表情で俺と皇帝を見ている。

「あの男もやるものよな、もつとも手強い敵を味方に取り込むとは流石にブラウンシュバイク公として宮中を凌いできただけの事は有る」

「……」

フリードリヒ四世は楽しそうだ。俺はどう答えてよいか分からず黙っていた。

「そちは残念よの」

「は？」

「もつとも頼りになる味方を敵に取られた」

もつとも頼りになる味方……。確かにそうだ、多少面白くないところはあつても頼りにはなる。彼が敵に回れば厄介な事になるのも確かだ。

「予はこの帝国を再生できる人間を探していた。そしてそちを見つけた。嬉しかったぞ、ラインハルト・フォン・ミューゼル。そちらこの帝国を新しく生まれ変わらせることが出来るだろうとな」

「……」

「そちはおそらくゴールデンバウム王朝を滅ぼすであろうの」

「陛下！ 弟はそのようなこと……」

「良いのじゃ、アンネローゼ。此処はバラ園じゃ、我等のほかには誰もおらぬ……」

「陛下……」

俺は黙って皇帝と姉上の会話を聞いていた。否定することよりも、俺の野心を知られていたことのほうがショックだった。確かにこの男は凡庸などではない、俺は一体何を見てきたのだらう。

「それでも良いと思っていた。帝国が生き返るのであればの」

「陛下、陛下は帝国が滅ぶとお考えでしょうか？」

恐る恐る皇帝に問いかけた。どう考えても皇帝は帝国の滅亡を前提に話をしている。本気なのだろうか。

「滅ぶであろうの、そちはそう思わぬか」

「……」

答えようが無かった。確かに帝国は混乱している。大貴族が勢力を伸ばし勢力を張り合い始めた。いずれは内乱になる。俺が皇帝になるためにはその内乱が起きる前に確固たる地位を固めなければならぬ。

「そちには済まぬ事をしたと思うておる。そちを引き立てながら、此処に来てそちを切り捨ててするようなことをした」

「切り捨てて……」

姉上が息を呑むのが分かった。だがそんなことよりも皇帝の言葉に興味があった。俺を切り捨てるとはどういう事だろう。考えていると皇帝は俺を見て笑った。

「そちは肝心な所でまだ甘いの」

「……」

俺が甘い？ 思わず言い返したくなったが堪えた。今口を開けばとんでもないことを言いそうだ。

「ヴァレンシュタインはこの国を改革するつもりじゃ。そしてブラウンシュバイク公、リッテンハイム侯、リヒテンラーデ侯、そして軍もそれを支持している。分かるか、そち意外にも帝国を再生できる人間がいると言っことじゃ」

「……」

「帝国を再生出来るのはそちかヴァレンシュタインであろう。その

方らは正反対よな。そちが火なら、ヴァレンシュタインは水よ。そちは全てを焼き尽くして新たな帝国を作るに違いない。犠牲は多かるう……。だから予はヴァレンシュタインを選ぶ……。皇帝として犠牲の少ない方法を選ぶ……。済まぬ」

「……」

俺はどう言えいいのだろう。ふざけるなと怒鳴るべきなのだろうか？　だが俺が皇帝の立場ならどうしただろう……。やはり犠牲の少ない方法を選ぶのではないだろうか……。

「ヴァレンシュタインから何か言われたか？」

「……自分に協力して欲しいと」

「そうか」

皇帝は俺の答えにゆっくりと頷いた。

「ラインハルト・フォン・ミューゼル、ヴァレンシュタインに協力するのじゃ、それがそちの命を救う事になる」

「！」

俺にあの男の下に付けというのか？

「アンネローゼの事を考えよ……。そちが滅ぶ時、アンネローゼも滅ぶ事になるぞ。それで良いのか？」

「……」

俺が滅ぶとき、姉上も滅ぶ……。

「そちにローエングラム伯爵家を継がせる話じゃが」

「はっ」

「あれは撤回する」

「！」

皇帝は俺を悲しそうな眼で見た。俺を侮辱しているわけではない、となれば……。

「そちを守るためにはむしろ爵位は不要じゃ。頼むぞ、ミューゼル大将。アンネローゼを守ってやってくれ。予の寿命は持つてあと三年、遺言と思つて聞いてくれよ……」

「はっ」

「久しぶりであろう、アンネローゼと話して行くが良い」

そう言つと皇帝は俺と姉上に背を向けバラ園を去つていった。俺は去り行く皇帝の姿を見つめた。自然と頭が下がっていた……。

美しい夢（その6）

■ 帝国暦486年7月12日 オーディン ブラウンシュバイク公爵邸 エリザベート・フォン・ブラウンシュバイク

午後からお客様が来る。母の話ではお客様はエーリッヒ・ヴァレンシュタイン中将だとか。母は乳母に私の服装を整えるようにと言いつけたけど珍しい事だわ、これまでそんな事は無かったのに。

おかしい事は他にも有る。父とヴァレンシュタイン中将は決して仲が良いわけではないはずだけど、どうして招待したのかしら。中將も私達貴族の招待を受ける事は無いって聞いている。フレーゲル男爵の事があるから仲直りでもしたのかしら。

私自身はヴァレンシュタイン中将に会えるのはとても嬉しい。中將は優しくて笑顔の素敵な方だって聞いている。出来ればお話もしたいけど父は許してくれるかしら？ ご招待するくらいだし、服装を整えろと言っくらいだから大丈夫だと思うのだけれど。

ヴァレンシュタイン中将がいらっしゃったのは午後二時を過ぎた頃だった。中將は私達に笑みを浮かべながら挨拶をしてきた。

「エーリッヒ・ヴァレンシュタインです。本日はお招きいただき有難うございます」

「おお、ヴァレンシュタイン中將、忙しいところを良く来てくれた。紹介しよう、妻のアマーリエ、娘のエリザベートだ」

「ヴァレンシュタイン中将、今日はゆつくりとなさってくださいね」
「有難うございます、奥様」

父と母が中将と挨拶を交わしている。私も何か話したかったけれど口を開けなかった。そんな時だった、父が私に話しかけてきた。

「エリザベート、お前も中将に挨拶をしなさい」

「エリザベートでございます」

「ヴァレンシュタインです。お目にかかれて光栄です」

私は名前を言うのが精一杯だったけど中将はそんな私を穏やかに見ている。恥ずかしかったけど、嬉しかった。中将は噂どおり優しい人みたいだ。

挨拶が終わって応接室に移るとソファアに座った。私は中将の横に座るようにと父に言われた。お茶が運ばれてきた。コーヒーが三つ、ココアが一つ。ココアの甘い香りが広がったけど、これは私に用意したの？

「中将はココアが好きだと聞いたのでな、用意させた」

「有難うございます、ブラウンシュバイク公」

中将がココア？ ちょっと可笑しかったけど中将は美味しそうに飲んでる。

「卿が招待を受けてくれた事に感謝している。さぞかし怒っているかと思ったのだ」

父の言葉に中将が苦笑した。父は中将を怒らせたのだろうか。

「お父様、ヴァレンシュタイン中将に失礼な事をなさったの？」

「あ、いや、その」

父がちよっと慌てている。中将がクスクスと笑い声を上げた。

「そんな事は有りませんよ、フロイライン。公が私に対して失礼な事などはしてはいません。多少強引ではありませんが」

「まあ」

父を見ると困ったような笑顔を見せている。父がそんな表情をするなんて珍しいことだ。

「ですが、今日こうして招待していただけた事は感謝しています」

「そう思ってくれるか」

「はい」

父は中将をじつと見ていたが一つ頷いた。中将も父を見ている。そして私を見て柔らかな微笑みを浮かべた。

■帝国暦486年7月12日 オーディン ブラウンシュバイク
公爵邸 オットー・フォン・ブラウンシュヴァイク

お茶の時間が終わるとヴァレンシュタインは仕事に戻らなければならぬと言って屋敷を辞去しようとした。悪いお茶会ではなかった、和やかで穏やかな時間だった。皆寛いで話をしていたと思う。ヴァレンシュタインが帰ると言った時には名残惜しいと思ったほどだ。

別れの挨拶をした後、ヴァレンシュタインはわしだけに分かるように“二人で話したい”と言ってきた。妻と娘に“少し中将に話がある”と言って場を外してもらった。

「ブラウンシュバイク公、フロイラインは未だ何も知らないのですね？」

「うむ、先入観無しで卿に見てもらいたかったのだな。娘をどう思

った？」

「悪い方では無いと思います」

ひとまずほっとした。まあお茶会の雰囲気から悪い印象は持たなかったと思っただが……。

「上手くやっていけるかな？」

「そうしたいと思います」

「うむ、娘を頼む」

ヴァレンシュタインが頷いた。大丈夫だ、信頼して良いだろう。

「これからフロイラインに伝えるのですか？」

「そうだ」

「では大変ですね」

皮肉かと思っただがそうではなかった。ヴァレンシュタインは生真面目な表情でこちらを見ている。

「なに、あれは卿の事が気に入ったようだ。心配はいらん」

わしがそう言くとヴァレンシュタインは僅かに苦笑した。

「これから宜しく御願います」

「こちらこそよろしく頼む」

「公爵夫人にも宜しくお伝えください」

「分かった」

ヴァレンシュタインが去った。さてこれから娘に話さなければならん。確かに心配はいらんが大変ではあるようだ。やれやれだな、いつそ妻に頼むか？　こういうのは父親よりも母親の方が向いているかもしれん。

ツヒ・ヴァレンシュタイン

典礼省から俺とブラウンシュバイク公爵家の養子縁組の許可が下りた。その際、俺がリメス男爵家の血を引く男子である事も合わせて典礼省にある家系図に登録された。リメス男爵家は領地も爵位も返上しているから登録されても俺には何も無い。

但しそれを請求すれば別だ。俺は今リメス男爵家の唯一の男子で爵位と領地を請求すれば許されるだろうという事らしい。典礼省の役人が恩着せがましく言いやがった。馬鹿馬鹿しい、そんな物要るか！

それにしても年寄りどもは仕事が速い。老い先短いから急ぐんだろう。俺を一日でも早くブラウンシュバイク公爵家に縛り付けたいらしい。この分で行くとエリザベートとの結婚も早まりそうだ。言っておくが俺はロリコンじゃない、胸を張って言うがどちらかと言えばマザコンだ。エリザベートに悪い印象は持たなかったが、結婚は大人になってからだ。

これから義父、ブラウンシュバイク公と共にフリードリヒ四世に拝謁する。なんだかな、どうしてこうなったんだか。俺にはいまだに良くわからない。フェルナーに、いやこの帝国の権力者どもに上手く操られているとは思えない。

唯一の救いはラインハルトがこちらに敵対的ではないことだ。皇帝フリードリヒ四世に会ってどうやら多少は変わったらしい。少し考える時間が欲しいと言ってきた。悪い徴候じゃない。

拝謁するために廊下を歩いていると遠巻きに多くの貴族達が俺を見ているのが分かった。そしてヒソヒソと何か話している。見世物じ

やない！ 全く不愉快な連中だ。これからずっとこんな日々が続くのかと思うとうんざりする。

この場で逃げ出したらどうなるんだろう。いや、皇帝の前で養子は嫌ですと言ったら。……許されるわけ無いよな、それこそ同盟に亡命だよ。公爵位と皇族との結婚を嫌って亡命か……。

凄いな、今年の宇宙十大ニュースのトップは間違いない。おそらくフェザンじゃ俺をモデルにした映画が作成されるだろう。おそらく公爵令嬢を振った俺の秘密の恋人は亡命者のヴァレリーになるに違いない。大ヒット間違い無しだ。

そんな事を考えていると向こう側からリッテンハイム侯がやってきた。

「ブラウンシュバイク公、これから陛下の下へ行かれるのかな？」

「うむ、養子を迎えたのでな、陛下に御報告をしに行くところだ」
頼む猿芝居は止めてくれ。

「ふむ、ヴァレンシュタイン中将、いやブラウンシュバイク中将か。良い跡取りが出来て羨ましい事だ」

「エリザベートも喜んでいる。サビーネが悔しがってはいないかな？」

「あれは未だ子供だ、それはない」

そう言うとしッテンハイム侯が大きな声で笑った。ブラウンシュバイク公もそれに合わせる。俺だけが沈黙している。

「中将」

「はっ」

「ブラウンシュバイク公爵家としッテンハイム侯爵家は共に帝室の藩屏として帝国を支えてきた。これからは中将、卿にも帝室の藩屏

たることを期待してよいかな」

この陰険親父、碌でもないことを言いやがる。あの時、銃ぶっ放して脅した事を根に持つてるに違いない。

「はっ、期待に背かぬよう務めます」

「うむ、頼むぞ」

ブラウンシュバイク公とリッテンハイム侯が顔を見合わせて頷いた。こいつら最初から示し合わせていたな。根性悪どもが！

リッテンハイム侯と別れて先に進むとようやく謁見室に着いた。謁見室にはフリードリヒ四世のほかにはリヒテンラーデ侯が居る。二人とも可笑しそうな表情をしている。ブラウンシュバイク公もだ。俺だけが楽しくない。

「ブラウンシュバイク公か……。今日は何の用かな」

「はっ、此度陛下のお許しを得て養子を迎えましたので御挨拶にと」
「おお、そうか」

ここでも猿芝居か。しかし俺もそれに付き合わねばならん。

「エーリッヒ・フォン・ブラウンシュバイクでございます」

「うむ、良い若者じゃな、ブラウンシュバイク公」
「はっ」

皇帝はブラウンシュバイク公に声をかけた後、今度は俺に視線を向けた

「エリザベートを頼むぞ、あれは予の孫だからの」

「はっ」

これで俺はブラウンシュバイク公爵家の婿養子が決定だ。

「陛下、臣はこれを機に家督をエーリッヒに譲りたいと考えていま

す」

「ふむ、隠居するか」

「はっ、お許しを頂けましょうか」

ブラウンシュバイク公の言葉に皇帝は少し考え込んだ。はてね、義父の隠居は確定事項のはずだが……。

「家督を譲るのは構わぬが、隠居は許さぬ」

何だ、それ……。ブラウンシュバイク公も妙な顔をしている。芝居じゃないな。

「と言いますと」

「これからも宮中には出仕せよ。……そうじゃな、出仕しても爵位が無くては何と呼べば良いか困るの……。そちには大公の称号を与えよう。ブラウンシュバイク大公を名乗る事を許すぞ、もつとも大公領というのは無いから称号だけじゃの」

そう言うフリードリヒ四世は可笑しそうに笑った。リヒテンラーデ侯も笑っている。まあ悪い話じゃない。屋敷で暇を持て余すよりはましだろう。リヒテンラーデ侯の考えかな、俺と公の関係を気遣ったか……。

「……恐れいりまする。これからも息子共々、相勤めしまする」

ブラウンシュバイク公は感激した面持ちで礼を言つと頭を下げた。俺も頭を下げる。顔を上げると皇帝とリヒテンラーデ侯が満足そうな表情をしている。上手い手だな。大公の称号だけでブラウンシュバイク公の心を取った。

謁見を終えると俺は義父と分かれた。紫水晶の間に行くつとヴァレリーと護衛が待っていた。合流して軍務省に向かう。護衛はいつも大男だ、見下ろされるのは良い気分じゃない、今日は不愉快なこと

ばかりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4773o/>

銀河英雄伝説～美しい夢～

2011年11月14日22時54分発行